

10周年シンポジウムのパネルディスカッション発言案

パネラー自己紹介（2分×5人）

10分

・この10年で多摩川がどう変わったか（かかわり方が変わったか）

テーマ 流域懇談会の活動を踏まえたうえで話す。

多摩川の自然を守る会の柴田です。会が発足したのは1970年2月で、会としては約38年間活動してきました。私個人は多摩川べりで生まれ育ち、子どものころは多摩川で泳いだり魚釣りをしたり中州の砂場で相撲をとったりしました。

今日の会は10周年ということで、この10年で多摩川がどう変わったかがテーマですが、自然にとっては10年も20年もありません。したがって、この10年に人間が多摩川をどう変えたか、ということになると思います。残念ながら、多摩川の自然環境はこの10年でいっそう悪くなりました。

河原に大量の土や砂が堆積し、クズやツルヨシ、オギ、オオブタクサ、ニセアカシアなどが繁茂して、河原植物は激減しました。浅川合流点より上流で橋の上から多摩川を見下ろすと、河原が森や林になっていることがよくわかります。源流部のシカによる植生被害での土砂流出や、上流部の宅地等の開発による土砂流出が原因と思われます。

中下流部は逆に殺風景になりました。グラウンドや人工公園は減らず、その造成で導入された土が、雨や増水で流出して下流の堰や河口付近に溜まっています。これまで自然豊かだったところでは、次々と護岸工事が各地で行われて、画一的な形状になり、どこでも見られる植物しか生えていません。スーパー堤防建設で治水は良くなったかも知れませんが、広々とした空間という河川のイメージはかなり損なわれました。堤防に立っても遠望がきかず、両岸にマンションや商業ビルが林立しています。河口の汽水域では土砂が堆積してオギ原が広がりつつあります。

幸いモトクロスは昔に比べるとかなり減りましたが、ラジコン飛行機とサバイバルゲーマーは増えており、不法ゴルフ場化もあちこちで見られます。

こういった多摩川の自然環境の悪化はすべて人間が引き起こしたことです。

これがまずは、この10年の多摩川の自然環境に対する私の印象です。」

テーマ 「多摩川での10年の活動」

20分

・多摩川での活動の思い：柴田隆行氏、鈴木眞智子氏（5分×2人）

さきほどは、多摩川の自然環境がこの10年で悪化したという印象を述べましたが、つぎにこの10年間に何をしてきたかについて、少し前向きにお話しします。

これまで38年間にはじつにいろいろなことがありましたが、この10年に限っ

と言うと、一番大きなことは京浜河川事務所に地域連携係ができたことです。

その前の1993年に河川環境保全モニターという制度ができて、私はその委員になったので、年度始めに年間の工事計画等の説明を受けて意見交換をしたり河川工事情報をもらったりしていました。それより以前は、私たちが多摩川を歩いて情報を集めて、京浜工事事務所に問い合わせをしたり抗議をしたりしていたのですが、モニターになってからは事前に情報が得られるようになりました。宿河原堰改築の時も、これで私たちはかなり早い段階で国と話し合うことができました。こうしたことが定期的に行われるようになったのは地域連携係ができてからで、初代の石田さん、二代目の土屋さん、そしていまの小栗さんから、河川工事情報を送ってもらって、それを関係諸団体に転送して、問題があれば事前に現地で協議をするというルールができたことは、多摩川の河川環境の維持にとって画期的なことだと私は思います。

河川工事以外でも、堤防に生えている日本在来植物を守るために除草の時期や方法を変えてもらって、たとえば毎年数株しか開花が見られなかったレンリソウが今年の5月13日には一度に335株の開花を見るまでになりました。毎年2、3株しか見られなかったスズサイコも50株ほどに増えました。

また、私たちの会独自の活動ではありませんが、永田地区でのカワラノギクの復元・保全活動では、京浜河川事務所と福生市の協力を得て、毎年除草や開花株調査などを行っています。

三代前の多摩川上流出張所長だった大石さんとは何度も一緒に現地を歩き、時にはラジコン飛行機を飛ばしている人たちと話し合いをしたりしましたし、二代前の所長の荒木さんも、現地協議には必ず顔を出し、多摩川で問題がある箇所のリストを作ってくれたりしました。前代の出張所長さんからは一度もお会いする機会がなくとても残念に思っています。これ以上言うと差し障りがありそうなので、これで終わりにします。

VTR「これまでの10年」(10分)

10分

・活動を始めた経緯：柴田隆行氏(2分)

1970年代初めは、多摩川の河川敷で、治水のためや、グラウンド・人工公園などを造成するために、ブルドーザーがあちこちで爆音を轟かせていました。身近な自然が次々と見られなくなる。ススキの野原さえ目に見えて減少しているという時代でした。他方で、まだクツワムシやマツムシの声が狛江の多摩川で聞かれ、多摩水道橋を渡るときコミミズクが飛んでいるのが見られました。

まだ間に合う という意識がありました。また、東京生まれで東京育ちの私たちにとって、ふるさとはこの東京でしかないから、自分の住んでいる所の自然を大切にしなければ、信州や北海道などの自然さえ守れないと考え

ました。

VTR「これからの10年」(15分)

15分

・30年間の活動実績からの今後の活動はどうなっていくか：柴田隆行氏(3分)

こういう公の場で、多摩川に生える貴重植物がどこにあるかを詳しく述べることに對して、参加者の皆さまにはたいへん失礼ながら、まだ抵抗があります。業者や採集家に盗まれたり、大勢見に行つて新芽やロゼットを踏みつぶされたりしないか、ということが心配だからです。

いまは、河川管理者から私が得た工事情報などを私の知る限りの人たちに転送していますが、本来は国がインターネットなどで情報を事前に全面的に公開して、関心のある人がそれを自由に見て意見を述べることができるべきでしょう。

西暦2000年のときに、当時多摩川センターの代表だった横山十四男さんが提唱して、『西暦2000年の多摩川を記録する会』を結成し、全員無償のボランティアで多摩川両岸62kmの利用実態調査とタンポポやカワウ、ゴミ投棄実態などの調査を行いました。再来年は2010年で、再度こうした市民住民による一斉調査をしようと計画していますが、流域懇談会ができて10年ということですので、こうした市民・住民と、国や地方自治体との連携を活かして、このような調査も実現できれば、先ほど述べた危惧も徐々に解消して、多摩川の河川環境の維持に関してつねに大勢の人びとの知恵が活かされていくのではないかと思います。

テーマ 「最後に行政に求めるもの、やりたい活動、いいたいこと。。。etc」 12分

・柴田隆行氏、鈴木眞智子氏、柴田敏隆氏、栗原秀人氏(3分×4人)

麻生首相は、多少の一級河川の地方自治体への管理委譲では満足せず、国土交通省の地方整備局そのものを解体すべきだと指示しているようですが、河川に関する限り、そうした発想は間違いだと私は思います。

住民も地方自治体も、目先のことに目を奪われがちになりますが、川は源流から河口まで、線さらには面につながっており、しかも自然ですから10年、20年程度の短期間の印象で、ことを進めてはならないと思います。長期的かつ総合的に河川を見て管理することができるのは、少なくとも現状では、国の機関しかない、と私は考えます。ただし、国の河川行政が間違つた方向に進まないという前提のもとでの話です。

ぜひ京浜河川事務所の皆さんには、しっかりとした展望と自覚をもって多摩川の自然をさまざまな破壊行為から守る仕事を、ひきつづききちんとしていただきたいと思います。